



Title	陸地測量部修技所に在学した清国留学生の名簿に関するノート
Author(s)	渡辺, 理絵; 小林, 茂
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター. 2007, 2, p. 102-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26985
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究ノート

陸地測量部修技所に在学した清国留学生の名簿に関するノート

渡辺理絵・小林 茂

東アジアにおける近代地図作製の展開を考えるに際し、それに関する技術の移転は重要な意義をもっている(小林, 2006)。近代地図は、軍事的色彩をともなう地形図だけでなく、土地所有の確定や地税の徴収に必要な地籍図というかたちで、近代国家の基礎をなしている。その整備にむけて、三角測量をはじめとする近代的地図作製技術が組織的に導入され、普及されていくことは、ある意味では必然的なプロセスであったと考えられる。ただし、その具体的進行については不明な点が多く、筆者らはここ数年来、20世紀初頭に急速におこなわれた日本から中国への地図作製技術の移転に焦点をあて、研究をすすめてきた。日本における地図作製技術の教育の中核を占めた陸地測量部修技所に留学した清国留学生の名簿の探索、その記念写真の分析、さらに中国の測量学校などで教育にあたった日本人教習の名簿の作成など、基礎的資料の整備につとめている(渡辺・小林, 2004; 2005)。

19世紀に東アジアでいち早く近代的地図作製技術の導入をおこなった日本は、日本国内の地形図作製を進めるだけでなく、台湾のような植民地では、土地調査事業においてこの技術を体系的に適用し、地籍図・地形図を作製した。それに際し、現地に訓練施設を設立して関連技術者を養成することとなった。これに対し、日本における陸地測量部修技所での清国留学生への教育も、国際的な地図作製技術の移転として注目される。もちろんこの時期には、多数の留学生が清国より日本に来訪し、陸地測量部修技所への入学もその一環と位置づけられる。またこれらの留学生の間で広がった政治運動は、のちの辛亥革命に大きな意義をもつことになった点も注目される(岡田, 1998: 263-295)。ここでは、問題を技術移転に限らず、政治運動にも視野を広げて、陸地測量部修技所に留学した清国学生の名簿について検討し、今後の研究にむけた資料としたい。

以下ではまず、前稿(渡辺・小林, 2004)以降にえられた資料もあわせて陸地測量部修技所に留学した清国学生の一覧を示す。この一覧を念頭におきつつ、つぎに第4期生の1人である黄郛(1880-1936)を中心に彼らの政治活動について検討し、さらに1915年に北京政府に組織された経界評議委員会ならびに地図作製技術の教育における修技所卒業生の役割について考えてみることにしたい。

1. 陸地測量部修技所の清国留学生の名簿

陸地測量部修技所(以下、修技所と略す)に留学した清国留学生に関する記録類は、現況では外務省外交史料館、東洋文庫および大阪大学文学研究科人文地理学教室の3つの機関に残されている。このうち大阪大学人文地理学教室所蔵資料は、記念写真である。すでに筆者らは、これらのうち外務省外交史料館および大阪大学人文地理学教室所蔵の資料について若干の報告をしている(渡辺・小林, 2004)。ここでは、東洋文庫所蔵の記録類につ

いておもに取り上げたい。

東洋文庫には、修技所における清国留学生の成績や測量教育のカリキュラムに関する記録が1冊残されている¹。「明治四十二年 測量部修技所清国学生 関係書類 清国学生監理委員」（以下、東洋文庫資料と略す）と表題がつけられ、目次には、第1表のような項目が設けられている。

東洋文庫所蔵の資料の収集経緯から、これらの資料の出自については十分に追跡することができないが、表題に見える「清国学生監理委員」から、20世紀初頭陸軍にもうけられていた同名の委員に関連するものと考えられる。またこの委員長は北清事変などで活躍した軍人の福島安正（1852-1919）がつとめていた。ただし記録類は、1件ごとに整理されておらず、順番も前後していることが多い。また、無関係な書類が間に混在していることも少なくない。

さてこの資料を構成するのは、明治41（1908）年12月～42（1909）年12月までの記録群で、陸地測量部から清国学生監理委員宛てに出されたやりとりである。記録紙は、「陸軍」と印字された用紙を使用しており、ほかに「駐日陸軍学生監督處」と印字された用紙が1例含まれている。この場合、「駐日陸軍学生監督」は、清国陸軍学生の監督に当たる中国側の官吏と考えられる（「北洋武備学生監督等の件」1904年、アジア歴史資料センター資料[C04014017100]など参照）。

陸地測量部から清国学生監理委員宛てに出された記録には、冒頭に「清第○號○」と「測清第○號○」といった具合に、記録番号が付されており、これに続いて日時と作成者名が付記されている。記録類は、陸地測量部事務官か、陸地測量部長大久保徳明の名前で作製され、押印も伴っている。宛名は、清国学生監理委員となっている。これに続いて用件が明記されるといった形式である。

これらの資料のなかに含まれる清国留学生の成績表は、留学生のリストをより完全な状態にするために有用な資料である。第2表は、留学生の人名と成績に関する資料を入学年別に整理した表である。

まず1期生から3期生までは修技所の卒業試験の成績がある。4・5期生については、学期末試験にあたる成績が残されている。また5期生については、成績表以外に派遣省別の人名調査の記録が残っている。6期生については成績に関する資料は残されていない。これは辛亥革命により卒業を待たずに退学を命じられたためである（渡辺・小林, 2004: 20）。ただし、清国側からの要請により人名表を作成している。このほかに、あとで示すような、3期生の中から卒業後、臨時的に設置された補習科に在籍した4名の成績表も残されている。上記の資料をもとに、かつて報告した留学生リストの誤字や不読を修正しつつ、より完全に近いかたちの清国留学生リストを作製した（第3表）。1期生より6期生までの氏名と、2

¹ 東洋文庫には、振武学校に関する資料も豊富である。たとえば、「振武学校沿革誌」1906、請求番号[6946]や「卒業生ニ関スル書類」1899-1905、請求番号[6942]などがある。

期生以降は、貫籍や出身地あるいは派遣省を付記することができた²。これらを見ると、第2期生は湖北・湖南省出身者が多かったのに対して、第6期生になると、直隸省や北京の出身者が多いことに気づく。また、5期生については、出身地と派遣省が異なっている者もいる。明治42年9月28日の清国測量学生の調査においては、学生の派遣省を調べることが主旨だったとみえ、電報には派遣省は出身地とは異なるという注意書きが強調して記されている。なお、第3表の中で○を付与している12名については、前稿(渡辺・小林, 2004:15)にて利用した外務省資料には記載があり、東洋文庫資料には記載のない人名を示している³。本稿で利用した東洋文庫資料は、先述したとおり、第1～3期生までは卒業試験に関する資料であり、それらに記載のある氏名は、修技所卒業生を意味する。したがって第1～3期生の○を付与した者は、卒業前に退学した可能性が高い。同様に4～6期生についても、何らかの理由により卒業以前に退学した者がいたことが推察される。反対に△を付与した第3期生の趙鰲は東洋文庫資料にのみ記載がある。中途入学のような形で、修技所へ留学したことが想定されるが、詳細については不明である。

つぎに修技所での教育について簡単にみておきたい。東洋文庫資料の大半は、清国学生の日課表で占められている。その一例として、第4表に、第4期清国学生日課表をとりあげた。

これによれば、午前9時10分より1時間目が始まり、10時30分に終了する。1コマ1時間20分の授業である。1日の授業は午後4時で終了する。三角科、地形科、製図科と分かれての授業と全科一斉の授業内容があることがわかる。第5表は、第4表を科別に整理したものである。算術・幾何学・製図学など基礎的な科目は全科の必修として編成された上で、各科専門の分野の講義を受講している。三角科は、水準測量や三角測量の授業があり、地形科は地形測図の授業が設けられている。20000分の1の地形図図式で測図が進められていたことも興味深い。また、製図科は、印刷術や彫刻術、写真学などを学んでいることが読み取れる。

こうしたカリキュラムのもとに、留学生は修技所での測量教育に専念した。学期末には試験が実施されている。第6表は、成績表の例として、補修科在籍者の成績を示した。5科目20点満点で採点され、序列が明記されている。卒業試験の場合は19～20科目の試験が実施された。また語学能力や日頃の生活態度などが教官より一言程度付記された。卒業試験では、総合と科別ごとの順位が算出され、すべて清国学生監理委員へ報告されている。補修科に在籍した4名の成績表には、備考にそれぞれの就職先が記されている。李は清国陸軍部に任用されたため、途中退学をしている。また王は、北京測繪学堂に、黄は広東測繪学堂に、焦は奉天測繪学堂に内定していることが読み取れる。このうち黄の就職先は、留学生リストの「省別」の欄に明記された地域の測繪学堂である。このことは、後述するように、修技所へ留学した学生は、卒業後その出身地域の測繪学堂に就職した者がすくな

² 出身地や費別、省別、派遣省などの言葉は、資料中の用語である。

³ 前稿(渡辺・小林, 2004:15)の「第1表 陸地測量部修技所へ留学した清国陸軍学生の名簿一覧」の資料番号A「現在測量部陸軍学生」の作製年次を、明治39年8月2日と記載したが、正しくは明治38年8月2日であった。

くなかったことを推測させる。

2. 黄郛の政治活動と陸地測量部の清国留学生

つぎに、上記第 3 表にみえる留学生名簿を手がかりに調査した結果えられた、彼らの動向に関する知見について報告したい。これはいくつかの側面に分かれるが、まず政治活動についてみることにする。

修技所に留学した清国学生のなかでもっともよく知られているのは、第 4 期生の黄郛 (1880-1936) で、各種人名辞典等にもこれに関する記載がある (Boorman and Howard, 1968: 187-192; 笠原, 1995a)。大阪大学人文地理学教室が所蔵する第 4 期生の卒業記念写真 (写真の撮影は 1910 年) にも黄郛の姿を確認することができる。またこの写真の裏に記入された黄郛の氏名の横には、「上海革命軍参謀」と注記されている (渡辺・小林, 2004: 23)。これは、辛亥革命時に、後述する陳其美 (当時上海地域の滬軍都督) のもとで、黄郛が参謀部長としてその側近にあった (張, 2005: 13) ことが陸地測量部の関係者に知られ、記入されたものであろう。このことはまた、陸地測量部が卒業生の動向を把握しており、辛亥革命における彼らの活躍を好意的に眺めていたことを示している。

黄郛は 1905 年に浙江武備学堂の第二期の日本留学生として来日し、清国陸軍学生の予備教育機関である振武学校に入学した。振武学校は 1903 年 8 月に本格的に開校した全寮制の学校で、修業期間は最初 15 ヶ月であったが、順次 18 ヶ月、さらに 3 年と延長された。また当時の学生はほとんどが公費による派遣であったという。この経営には上記の清国学生監理委員が大きく関与していた点も留意される (筆者不詳, 1907a)。

さて黄郛は、来日の年に中国同盟会に入会し、1907 年になるとその陸軍留学生の組織として「丈夫成城団 (丈夫団)」を結成した。張 (2005: 6-7) が示しているこの「丈夫団」のメンバーのリスト (計 33 名) には、李烈鈞 (1882-1846)、閻錫山 (1883-1960)、李根源 (1879-1965)、李書城 (1881-1965)、程潜 (1881-1968)、張群 (1889-1990) のような、のちに陸軍士官学校を卒業することになる学生が含まれているほか、曾紹 (昭) 文 (3 期)、段 (殷の誤記と思われる) 承燾 (2 期)、陳之驥 (2 期) のような修技所を卒業する学生 (かっこ内は入学期) が登場する。

曾紹文 (1883-1913) は、1904 年に日本に留学し、振武学校を経て修技所に進学した。その間、1905 年 8 月に同盟会に参加し、修技所を卒業のうへ、1908 年に帰国している (徐友春主編, 1991: 1197)。大阪大学人文地理学教室蔵の第 3 期生の卒業記念写真 (1908 年 12 月 5 日) にもその姿がみえ、写真の裏側に書かれたその氏名の横に線がのび、「黄興ノ副官」と注記されている (ただし渡辺・小林[2004:19]掲載の写真では、この部分はカットされている)。これは、辛亥革命に際し武漢の革命軍を指導した革命家の黄興 (1874-1916) のもとで、曾紹文が副官長をつとめていたことを示すものであろう。

つぎの段承燾 (1877-1946) は、ここで参照している『民国人物大辞典』では、1903 年に日本に留学し、陸軍士官学校 (5 期) を終了したとされている (徐友春主編, 1991: 730)。陸軍士官学校の第 5 期は、1907 年 7 月 1 日入校、1908 年 11 月 26 日卒業とされており (岡

田, 1998: 277)、他方修技所の第 2 期の卒業試験成績の日付は、1906 年 3 月とされている。時期的にみれば修技所を卒業してから士官学校に入学し、これを卒業することは可能と考えられる。また殷承瓚は、地図作製関係者というよりは軍人としての活動歴がめだち、士官学校卒業の可能性も充分考えられる。今後さらに検討したい。

もう一名の陳之驥については、まとまった略歴が入手できなかったが、辛亥革命に際し軍事方面で活躍したことはあきらかである（張, 2005: 20）。

以上、「丈夫団」に参加した陸地測量部修技所の卒業生についてみた。これまで士官学校卒業生については、そのごの政治活動・軍事活動について言及されてきたが、この点は修技所卒業生についても留意されるべきであろう。ただし、黄郛をふくめ、「丈夫団」に参加した修技所卒業生は、地図作製よりも軍事や政治での活躍があきらかである。「丈夫団」への参加は不明であるが、その他で略歴が把握できる、いずれも修技所第 4 期生の井介福（1881-1928）、彭程萬（1877-没年不詳）（徐友春主編, 1991: 22, 1092）、さらに俞應麓（1878-1925）でもこの傾向がみとめられる。

俞應麓の場合、生まれは江西省で、少年時代は私塾で学び中学堂に進学した。1903 年江西省武備学堂に進学し、2 年後同省からの選抜で官費留学生として日本の振武学校に留学することとなった。その後、修技所第 4 期生として三角科へ進学し、この時中国同盟会に参加し、後の政治活動につながる思想的影響を受けたという。同じ頃、静岡の旅館店員と結婚し男児をもうけている。家族を残し単身帰国した俞は、江西省の測繪学堂学監となるが、1912 年以降は地図作製からはなれ、都督府の軍務部長および軍政司長などを兼任し、晩年には都督府軍事会議特派員や江西討袁軍司令部総監といった軍部の中核的な任務に奉職している⁴。こうした履歴は、上記第 4 期生の卒業記念写真の裏の文言にも反映し、彭程萬については「江西軍参謀長」、俞應麓については「江西軍都督」と注記されている。

なお、黄郛をはじめとするこれら第 4 期生は、1907 年 11 月 5 日付けで清国公使より外務大臣に提出された陸地測量部入部志願者の名簿に氏名が記されており、1908 年になって修技所に進学したと考えられる。

修技所の学生の名簿について、関連してもうひとつ注目されるのは第 2 期生のリスト（1905 年 8 月作成の「現在測量部陸軍学生」⁵）に「陳其美」の名前がみられる点であろう。これは出身地からみても辛亥革命で活躍した上記の陳其美（1876-1916）と考えられる。陳其美は 1906 年に来日し、はじめは東京警監学校、のちに東斌学校に入学したとされている（Boorman and Howard, 1967: 163-165; 笠原, 1995b; 周主編, 1999: 243）。いずれも中国人留学生のために開設された学校で、前者は警察科・監獄科の 2 科で構成され（筆者不詳, 1906）、後者は兵学予科および兵学科で構成されていた（筆者不詳, 1907b）。また陳其美は学業よりも政治活動に忙しかったという。修技所における陳其美の在学が確かだとすると、それがどの程度つづいたかについては、検討の余地が大きい。さらに上記「現在測量部陸軍学生」の作製時期からすると、陳其美は 2005 年にはすでに来日していたことになり、日

⁴ http://home.kimo.com.tw/twenhsikimo/yu_ying_luh-bios-02.htm

⁵ 注 3 を参照。

本留学時の履歴に関する再検討が必要といえよう。黄郛と同時期に在学した可能性はないと考えられるが、辛亥革命に際して南京政府の樹立に大きな役割を果たした陳其美のもとで、黄郛が参謀部長に就任したことについて、何らかの関連性を想定させる。

以上のようにみてくると、陸地測量部修技所に学んだ留学生も、とくに予備教育機関であった振武学校での在学を通じて、政治運動に関与したことが判明してくる。また振武学校や修技所で、のちに重要な役割を果たす人的ネットワークができた可能性が大きい。

3. 経界評議委員会委員

修技所卒業生の中国における活動については、さらに検討すべきことが多いが、関連してもうひとつ注目されるのが、1915年1月に北京政府が組織した経界評議委員会のメンバーである。経界評議委員会は、辛亥革命後の中国が地籍図作製をふくむ土地調査事業を進めようとして設置した経界局の事業計画を立案するために構成された。日本の陸軍士官学校への留学経験をもつ軍人、蔡鍔(1882-1916)が委員長で、委員は「経験が豊かで技術に精通した者」および関係する「各機関主管人員」30名が招へいされた(笹川, 2002: 23-26)。このなかに計7名の修技所卒業生がみられる。

地図関係では、参謀部測量局長の陳錦章(第2期および第3期)、参謀部製図局長の陳嘉樂(第4期、製図科)、参謀部第六局第一科長の劉器鈞(第3期、三角科)、参謀部第六局第二科長の李正鈺(第2期、科名不明)、参謀部第六局第三科長の潘協同(第5期、製図科)、陸軍測量学校長の李蕃(第3期、三角科)と6名に達し、地図作製関係の技術者と考えられる者が全員修技所出身者で占められることが留意される⁶。これには、経界評議委員会が、地籍測量にくわえて、三角測量や地形測量もおこなおうとしたことが関与したと考えられる。

また軍人としては総統府軍事諮議陸軍中將の上記殷承燾(第2期、科名不明)がおり、この人物は上記丈夫団の一員であったことも想起される。殷承燾はまた、経界局がおこなった、外国における土地調査事業に関する調査のうち、朝鮮と関東州についても担当しており(笹川, 2002: 36; 小林・渡辺, 2006)、地図作製技術者以上の役割を期待されていたと考えられる。殷承燾は、ただし袁世凱に反対して上記蔡鍔が昆明の雲南都督、唐繼堯と合流するにいたった「第三革命」(1915年12月)に際しては、上記丈夫団の李烈鈞・李根源とともに、これに参加しており、彼の委員任命は政治的な意味を濃厚にもっていたと想像される。

この経界局の土地調査事業は、財政的要因のほか、試験的な対象地での住民の反対などにより、短期間で挫折することになった(笹川, 2002: 26-32)が、当時は修技所卒業生に対し、とくに技術的な点で大きな期待がよせられていたことがうかがえる。また殷承燾の場合は、日本留学時に形成されたと考えられる政治的人脈が一定の意義をもったことを想定させる。

⁶ 小林・渡辺(2006)では地図関係は4名としたが、名簿を再検討したところさらに2名の委員がいたことが判明した。

以上のように、修技所卒業生の活動をみてくると、そのマスターした技術が当時の中国で貴重なものであったこと、さらに彼らが留学中に形成した人脈がその後の活動を考えるうえで一定の意義のあることがうかがわれた。以下ではさらにその彼らの地図作製に関連する教育における役割についてみておきたい。

4. 地図作製教育への関与

前節では、1915年頃の北洋政府のなかで、陸地測量部修技所卒業生が地図関係の主要ポストについていたことを示した。彼らの帰国後の地図作製とのかかわり、とくにその教育との関係をさらに検討するために、『中国測繪史、第二巻』（『中国測繪史』編輯委員会編，1995）などに代表される関連文献によって、その履歴を追跡した。第7表は、これを整理したものである。

上記のように、第3期生の李蕃は、1915年頃中国における測量教育の中核機関である中央陸軍測量学校の校長に就任していた（『中国測繪史』編輯委員会編，1995：333）。これは清末に設立された京師陸軍測繪学堂を、民国になって改組したもので、参謀本部第六局に属し、李蕃はその首任校長であった。また修技所を卒業後、高等科に進学した劉器鈞は1931年～32年に中央陸軍測量学校教育長に就任し、翌年には中央陸地測量学校（前中央陸軍測量学校）の校長を勤めている。このころには、中国でも航空測量が発達しており、測量教育の拡充がもたられていた（『中国測繪史』編輯委員会編，1995：333-334）。

以上のような中央の教育機関のほか、地方の測量学校の幹部をつとめた者もすくなくない。たとえば上記の井介福は、1914年には故郷の山西省の測量局長に就任し、測量学校長も兼務した（徐友春主編，1991：22）⁷。また俞應麓も辛亥革命前には、故郷の江西省測繪学堂に勤務していた。これに関連して興味ぶかいのは、1909年に湖北陸軍測繪学堂に入学した喻育之が、学堂の校長および教官には日本へ留学した者が着任したと回顧している点である（喻，1986：88-91）。すでにすこしふれたように、陸地測量部修技所卒業生は、このようなかたちで出身地に帰り、測量をはじめとする地図作製教育に従事する場合が多かったと考えられる。彼らによって、地図作製技術がどのように中国に普及したかについては、なお検討の余地があるが、それが地方にもおよんでいたことはあきらかである。

以上、陸地測量部修技所の学生名簿を手がかりに、彼らの政治活動や地図作製に関する活動を検討した。その結果まず、多数とはいえないにしても、当時の社会情勢を反映して政治活動に参加した者がおり、とくに辛亥革命では、中枢部で活躍したものもみられた。また、経界評議委員会では地図関係で重要な役割をはたすことが期待されていたことがあきらかになるとともに、測量をはじめとする地図作製教育にたずさわった者についてもある程度の資料がえられた。もちろん彼らの留学は長期間継続せず、地図作製に関連したその影響力の持続性にも限界があったと考えられるが、中国における近代地図の作製におけるその役割について、不十分ながら展望を示すことができたと考えられる。今後はさらに

⁷ 井介福も『民国人物大辞典』では士官学校に学んだとされる。

こうした観点から彼らの活動歴を追跡して、技術の移転が最終的にどのような意義をもったのか検討することとしたい。

文献

- 岡田英弘(1998)『現代中国と日本』新書館.
- 笠原十九司(1995a)「黄郛」山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会, 298-300.
- 笠原十九司(1995b)「陳其美」山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会, 83-84.
- 小林茂(2006)「近代日本の地図作製と東アジア：外邦図研究の展望」*E-journalGEO*, 1(1): 52-66.
- 小林茂・渡部理絵(2006)「東アジアの土地調査事業における広東省土地調査冊の位置づけに関するノート」、片山剛編『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』1号、大阪大学文学研究科片山剛研究室, 14-23.
- 笹川裕史(2002)『中華民国期農村土地行政史の研究』及古書院.
- 周棉(主編)(1999)『中国留学生大辞典』南京大学出版社.
- 『中国測繪史』編輯委員会編(1995)『中国測繪史、第2巻』中国測繪出版社.
- 張学継(2005)『黄郛伝』團結出版社(北京).
- 徐友春(主編)(1991)『民国人物大辞典』河北人民出版社(石家荘市).
- 筆者不詳(1907a)「留学生学校(十)、振武学校」『同仁』14: 28-30.
- 筆者不詳(1906)「留学生学校概況(二)、東京警監学校」『同仁』6: 27-29.
- 筆者不詳(1907b)「留学生学校(五)、東斌学校」『同仁』9: 29-31.
- 山田辰雄編(1995)『近代中国人名辞典』霞山会.
- 喻育之(1986)「記陸軍測繪学堂」『武漢文史資料』1.
- 渡辺理絵、小林茂(2004)「日本—中国間の地図作成技術の移転に関する資料について」『地図』(日本国際地図学会), 42(3), pp. 13-28.
- 渡辺理絵・小林茂(2005)「20世紀初頭における日本—中国間の測量技術の移転：三角測量を中心として」*Newsletter* (平成16年度～18年度・科学研究費基盤研究[A][1]、東アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程)、4号(国際シンポジウム：中国近代地理学の成立と伝統的地理思考), 55-62.
- Boorman, H.L. and Howard, R.C. (ed.) (1967) *Biographical Dictionary of Republican China, Volume 1*. Columbia University Press.
- Boorman, H.L. and Howard R.C. (ed.)(1968) *Biographical Dictionary of Republican China, Volume 2*. Columbia University Press.

第1表 測量部修技所清国学生関係書類一覧

1	第一期第二期卒業試験成績表
2	卒業生再入学ノ上、高等科習修ノ件
3	右学生(孫桂馨・趙鰲)更ニ二ヶ年修技所へ入学許可ノ件
4	李沛ヲ陸軍部ニ於テ任用ニ付、退学帰国ノ件
5	邱丕振外ニ名修学ニ堪ヘサルニ付退学ノ件
6	霍色哩退学ニ関スル件
7	陸軍部ニ於テ測量部学生派遣ノ件
8	測量部学生電送ノ件
9	清国学生廿五名修技所入学ノ件通報

陸地測量部『測量部修技所清国学生関係書類』陸地測量部,
1905-1909. 東洋文庫所蔵: 請求記号 6938。

第2表 清国留学生の人名・成績に関する資料一覧

	留学生の人名・成績に関する資料名	作製日
1期生	第一期清国学生卒業試験成績表	明治 38 年 3 月 30 日
2期生	第二期清国学生卒業試験成績表	明治 39 年 3 月
3期生	清国陸軍学生卒業試験成績表	明治 41 年 12 月 3 日
4期生	第四期清国学生成績表(第二学年末)	明治 42 年 12 月
5期生	第五期清国学生第一学年前学期学術科成績並志望科別表	明治 42 年 6 月 2 日
	第五期清国学生成績表(第一学年末)	明治 42 年 12 月
	清国測量学生〔派遣省調査〕	明治 42 年 9 月 28 日
6期生	第六期清国学生人名表	明治 42 年 12 月 27 日
補習科	清国陸軍学生補習科成績表	明治 42 年 6 月 2 日

陸地測量部『測量部修技所清国学生関係書類』陸地測量部, 1905-1909. 東洋文庫所蔵: 請求記号
6938. より作製。〔 〕内、筆者。

第6表 清国陸軍学生補修科成績表

一、学生八四十一年十二月修技所規定(製図科三ヶ年)ノ学科ヲ 卒業同日更ニ入学本年五月尽日迄補修学生トシテ 右ノ学科ヲ修業セシモノナリ 二、学生ハ一般ニ熱心ニ勉強シ成績良好ナリ 三、李沛ハ清国陸軍部ニ於テ任用ノ為メ四月九日退学セシモ参考ノ為併記ス 四、学生卒業後ハ左ノ箇所ニ帰国就職スル由 王八北京測繪学堂ニ、黄八広東測繪学堂ニ、焦八奉天測繪学堂ニ	17.0	10.0	16.0	13.0	印刷術
	18.0	15.0	16.0	17.0	製板学 写真
	17.0	16.0	16.0	18.0	製板術 写真
	—	18.0	17.0	18.0	測図学 地形
	—	16.0	18.0	17.5	測図術 地形
	—	75.0	89.0	83.5	合計
		15.0	16.6	16.7	平均
	良好ニシテ読書ニ 熟達スルモ会話ハ 充分ナラス	良好ニシテ読書會 話共ニ熟達ス	良好ニシテ読書ニ 熟達ス会話ハ少シ 拙ナレトモ能ク通ス	佳良ニシテ読書 会話共ニ熟達ス	普通学 及語学ノ程度
	—	3	2	1	序列
	—	41年12月	41年12月	41年12月	年日 入学
	李沛	焦滇	黄荣祓	王慶舛	姓名
	雲南	山西	広東	陸軍部	省別

陸地測量部『測量部修技所清国学生関係書類』陸地測量部,
1905-1909. 東洋文庫所蔵: 請求記号 6938. より作製。

第7表 中国人留学生の母国帰還後の動向

氏名	担当	年次	中国帰還後の動向
李 蕃	三角科	3期生	中央陸軍測量学校校長
劉 器鈞	三角科	3期生	中央陸軍測量学校教育長(1931年～32年・1940年～42年) 中央陸地測量学校(前中央陸軍測量学校)校長(1932年)
黄 栄紱	製図科	3期生	広東測繪学堂(1909年)
王 慶舛	製図科	3期生	北京測繪学堂(1909年)
李 沛	地形科	3期生	清国陸軍部(1909年)
焦 埧	製図科	3期生	奉天測繪学堂(1909年)
黄 鄂	地形科	4期生	軍諮府測量部地形科科員
井 介福	地形科	4期生	山西陸軍(地)測量局局長(1921年)
彭 程萬	三角科	4期生	江西省測量局三角科科长・測繪学堂教職
俞 應麓	地形科	4期生	江西省測繪学堂学監
張 瑞麟	地形科	5期生	安徽陸軍(地)測量局局長(1913年)
楊 丙	(除名)	5期生	陸軍測量局(後に参謀本部第六局)局長(1912年)
憑 舜生	地形科	5期生	東三省陸軍測量局局長(1923年)・黒龍江分局局長(1924年)
雷 寵錫	地形科	5期生	陝西陸軍測量局局長(1913年)
師 端章		6期生	河南陸軍測量局局長(1912年)
張 彦臣		6期生	山東陸軍測量局局長・山東陸軍測量学校校長(1911年)

《当代中国》双書編輯部『当代中国的測繪事業』中国社会科学出版社, 1987, 11-17頁。中国測繪史編輯委員会編『中国測繪史』中国測繪出版社, 1995, 233~246頁。および陸地測量部『測量部修技所清国学生関係書類』陸地測量部, 1905-1909。東洋文庫所蔵: 請求記号 6938。より追跡、作製。